

とば」への無私なる参究の道へとひとを招き入れる。

こうして、本書は己れを無化する“ことば”を探ねる漂泊の旅へとすべてのひとを誘（いざな）う貴重な書物となっている。

京都大学文学部に、わが国で初に開設された「キリスト教学講座」の教授として、かつて有賀鉄太郎博士が世界ではじめて拓いた「ハヤトロギア」の道（本書 287 頁参照）が、いま五十年を経て、宮本久雄氏により継承され、さらに新たな「探究の道」として検証され、展開されているのを見るのは喜ばしい。わが国における「哲学探究」において、先達が開いた道の意義をただしく見極め、これを継承してゆくことのあまりにもすくないのを思うにつけ、本書の意義は大きい。

いま、まさに「ハヤトロギアの季節」が到来しているのではなからうか。

---

Adam G. Cooper

*The Body in St. Maximus the Confessor:*

*Holy Flesh, Wholly Deified.*

Oxford, 2005, pp. xii+287.

谷 隆一郎

本書は、表題から見て取られる通り、証聖者マクシモス（580 頃-662）の哲学・神学の基本線を、とりわけ身体性（corporeality）という観点から明らかにしようとしたものである。著者については詳らかにしないが、本書は元来は A・ラウス指導のもとでダーラム大学神学部に提出された博士論文をもとに記されたものである。著作の形態と筆致は型通りのもので、とくに興趣に富んでいるとまではゆかないが、本書は原典の重要な文脈を数多く訳出しつつ、けれんなき吟味と解釈を提示しており、マクシモス研究の一角を占める労作と見受けられる。

本書の章立ては五章に分かれたれ、それぞれ 1. 身体性と隠蔽, 2. 身体性と世界,

3. 身体性とキリスト, 4. 身体性と教会 (全一的交わり), 5. 身体性とキリスト者となっている。そこから窺われるように、本書は、身体性 (質料性)、有限性そして時間性といった、教父的伝統 (広くはヘブライ・キリスト教全体) に特徴的な主題を、マクシモスの主要な文脈に即して総合的に検討したものである。

著者は本書を書き起こすに際しての素朴な問いとして、次のように問う。「身体が神化される (神的生命に与る) とき、身体に何が生じるのか」、あるいは「人間という身体的な存在者が神的な本性に与るとき、何が生じるのか」と。このように言われるとき、その背景にはむしろ、ヘブライ・キリスト教の伝統が古代ギリシア的な諸伝統を一つの拮抗のもとに摂取しかつ超克していった未曾有の歴史が存する。そして、言うまでもなく証聖者マクシモスは、数世紀に及ぶそうした思想的格闘と展開の集大成者と目される人であり、「ビザンティン神学の父」(J・メイエンドルフ)、「全時代を通じて最も傑出した思想家の一人」(L・トゥーンベルク) などと評されている。

さて、著者クーパーは、ロゴス・キリストの受肉と神人性、および身体性の持つ多様な多次元の意味を論じる。すなわち、神の子キリストの受肉とは、単に二千年前の特殊な出来事として対象化されるだけで済む問題ではない。ある意味で受肉は、その神的な働き (エネルゲイア) を受容する人の根源的経験を通して、多様な仕方で顕現してくるのだ。この点、著者はマクシモスの文脈に忠実に、受肉を単に天下一の一回的な事態として言挙げするのではなく、いわば神化という人間的経験に注目しつつ、受肉と神化との関わりそのものを問い披こうとするのである。その際、まず大きな手掛かりとなるのは、マクシモスの次の言葉であった。「神と人間とは互いに範型である。つまり、人間が愛によって自らを神へと神化させたほどに、それだけ神は人間愛によって人間となる。また人間が、本性的に不可視なる神を諸々の徳 (アレテー) によってあらわに証示する限りで、人間は神によって引き上げられる。」著者によれば、これはキリストとは区別された他の受肉であるというよりは、むしろ「神化の力あるロゴスの受肉へとキリスト者が絶えず前進し、体現させてゆくことだ」という。そして、「神的な力はかく神化された主体において具体的に顕現してくるのである。」

逆に言えば、神化 (神的生命への与り) という事態には神的な力が働いていることが見出されようが、そうした神的な働き・エネルゲイア (あるいはむしろ神人的働き) はロゴス・キリストの受肉と神人性の現存を証示しているのだ。とすれば、このことは、ロゴス・キリストの受肉ということが見出され語り出されるための、根源的

な場・経験となり得よう。なぜなら、受肉の教理なるものは、始めから問題の局外に前提されていたというよりは、むしろイエス・キリストに出会った使徒たち（および彼らに連なる人々）が、己れを無化し超出してゆくかのような脱自的経験のうちから語り出されたと考えられるからである。つまり、そうした脱自的愛のうちに、しかも超越的な仕方でも働く神人的働き（エネルゲイア）を経験することから、その成立根拠として神人性（ロゴスの受肉）の現存が証示されるであろう。そして、かかる神化の経験にあっては、人間本性の変容が見られるが、それは、「ロゴスの受肉への参与」、「身体の聖化」の道として語られることになる。この点、古代ギリシア的伝統が身体や質料に積極的な意味を認めず、多分に無時間的な形相・本質主義に傾くのとは、大きな対照を為しているのである。

ところで、身体ないし身体性はマクシモスにあって、神的働き（エネルゲイア）の顕現の場・道具として広い意味合いで捉えられる。つまり、人間、世界、聖書などがそれぞれの仕方でも、かつ類比的に神的な働きを宿すのだ。神は魂と身体との全体を通して顕現するのであり、ある意味で身体あってこそ神化もまた実現する。とすれば、身体とは、もはや体の個々の部分や感覚器官などである以上に、魂・人間が神（＝在りて在る存在）を受容し得るといふ、その変容可能性を担う何ものかであろう。実際、マクシモスによれば、さまざまな感覚はそれぞれに固有の領域に閉じられているわけではなく、魂の諸能力に対応し、交流し得る。すなわち、魂が感覚を正しく用いるとき、ロゴス的知的な事物の隠れた本性を可視的なものの外形に刻印しつつ、両者相俟って靈的な美の世界を形成してゆくという。そうした営みを通して、魂と身体との結合たる人間本性が自らのより善き開花・成就へと向かう。それはキリストに従う道であり、そこにおいて人は、キリストの神性の無限性が質料的身体的事物に宿されることを、自らの身に経験するのである。

もとより、われわれの生きる世界には、マクシモスによれば、(i) 創造主と被造物、(ii) 男性と女性、(iii) 楽園と人の住む世、(iv) 天と地、(v) 可知的なものと感覚的なもの、という異なりが存する。有限なもの、部分的なものへの執着と傲りのために、そうした異ならないし分裂が顕在化してしまうのである。しかし、本来それらは多様にして一なるものとして全一的なかたちを形成してゆくのでなければならない。その際、人間は諸々の自然・本性（ピュシス）の紐帯としての働きを為し得るのだ。すなわち、ロゴスの根拠に対して人が正しく応答すること、本性に即してよく意

志することによって、宇宙万物におけるさまざまな部分が全体として相俟って、神化のかたちへと改めて形成されてゆくという。また逆に、悪とは、人やものに対して不正に関わること、事物を誤用することであり、そこに存在の欠落した姿（善性の欠如）が生じてくることになる。

総じて本書は、証聖者マクシモスの豊かな文脈に依拠しつつ、諸々の有限な、広義の身体的な部分がよりよく結合してゆくことのうちに、神的なロゴスの宿り・受肉が多様にして一なる仕方で生じてくることを丁寧と跡づけている。それはつまり、ロゴス・キリストの受肉を単に過去の一回的な出来事として固定化するのではなく、時間的存在者たるわれわれの営みの、その都度の今、何らか現前し得ることとして再発見してゆくことであった。そして、受肉と神化との密接な連関は、周知のごとく、つとにアタナシオスやナジアンゾスのグレゴリオスの定式化して語るところであったが、マクシモスはかかる根本的事態の内実をいっそう詳しく吟味し洞察しているのだ。本書はそうした文脈をも数多く取り上げ、マクシモスの洞察をすぐれて浮彫りにしている。それを承けて一言付け加えるならば、マクシモスの論はおそらく、人間の神化という事態のうちに働く神人的エネルゲイアを凝視することによって、そのエネルゲイアの主体たる「ロゴス・キリストの受肉（神人性）」の今、ここなる現存を、いわば経験の内側から改めて見出し語り出すものでもあったと思われるのである。